今その反動的暴力主義者の手によつて倒れなければならぬことになつたことを私は悲しむ者である。

然し、大杉はその主義の為めに倒れたことを喜んで居よう。私は大杉の為めに喜ぶ。

たゞ、かくしてわが日本が混乱の中に何の光をも見出し得ないとすれば、私は愛する日本の為めに悲しまざるを得ない。

主義として、大杉君の思想は〇〇〇〇〇〇〇。然し、私は労働組合の実際運動に関係してゐて、無秩序に陥り易い傾向のある群衆を対手にしての個人主義的アナキズムは余程の危険を伴ふものであることを思ふ。道徳が本能化した場合に大杉君の思想は実現する。道徳の本能化とは、暴力が凡て忘れられ、人々が盗まず、貪らず（余剰価値を求めず）、殺さず、姦せざるに至ることで、さうなつた日に大杉君の云ふ世界は実現するのである。此点から云つて、私は漸進的に歩むことの必要を常に考へて居る。

私はマルクスの学説の真理を考へ、マルクスとバクニンの衝突の歴史を考へて、ボルセヴヰキ派とアナキスト派の対立を悲しんだが、実行手段に於ては何れにも賛成しない。たゞ一つアナキスト派があまりに理想に走り過ぎて、組織の必要を忘れたことを悲しむ。さればと言つて、ボルセヴヰキの一党派専制の執政官制度に私は賛成し難い。私としては、質実なる労働組合が社会の中核となり、その組合の自由を基礎として、新社会が建設せらる可きものだと思つてゐる。その為めにはあまり専制であつても困るし、あまりに無組織であつてもならぬと思ふ。私はやはりギルド中心主義を主張する。そしてギルドがサンヂカリズムに似てゐる点は、その理想主義にあるだけそれだけ、大杉君の暴力説を否定し乍らも私が自らを彼と親しきものゝやうに感ずる点である。

大杉は殺されて井戸の中に投げ入れられた。然し彼の人なつかしい、親しみのある社会改造の理想は、そんなに易く葬られ去るものではない。彼の大きな眼は永遠に我等の行道を見守つて居よう。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。（一九二三・一〇・一七　長崎丸甲板にて）

南京米のママちやん

——台所芸術の創作家——

十一月十六日の真昼頃、本所区松倉町のバラックに一人の書生と女中に見送られて来た一人の婦人があつた。

色の白い、美しい輪廓の持主で四十過ぎの、誠に上品な貴婦人型の人であつた。その一週間程前に、早稲田の安部磯雄先生の紹介で、私のもとで奉仕生活を送りたいと云ふ申込みがあつた。外の人の紹介でも無いし、安部先生の紹介であるので、私は一も二も無くお引受けをした。

それ以後、この婦人は朝の四時から起きて、私達青年の為めに炊事の全部を引受けてくれてゐる。

私達は十月十九日に本所松倉町の焼野原にテントを張つてからずツと南京米を食つてゐた。それで、炊事の担当者は南京米を朝晩焚かねばならなかつた。で、私はその婦人に『南京米のママちやん』

と云ふあだ名を献上した。その名は辯護士の宮原君が発明した名であつたが、今日ではみな『南京米』を省いて、『ママさん』と呼ぶやうになつた。

正月三日の間は済生会の巡回看護班を預つてゐた関係もあつたが、私の宅で食ふ人々の数は八十五名を下らなかつた。その凡ての炊事の世話を南京米のママちやんは一人で引受けてやつてくれた。

結婚して二十余年間、夫は知名の実業家であり、義兄は東京市内有数の工場専務取締役をして居る彼女が、何故その家庭を捨てゝ、下座奉仕をすることになつたか、それは、夫の放蕩の結果、二十数年間の結婚生活に夫と同棲したのは僅かに四年間で、夫は他の妾と二十年以上同棲して居るのであつた。

而も、夫の実母、その他家庭の面倒な事は凡てはこの婦人が見なければならないと云ふのである。

二十余年間辛抱した彼女が、去年の春もう堪え兼ねて、無意味な結婚生活を捨て、下座奉仕に出でたいと思つて、神戸の私を尋ねんと決心したけれども、夫なる人はそれに反対して「もう一ケ月すれば、もう二ケ月すれば」とハッキリした態度を取らない。それで延びて来たのだが、この大震災に際して遂に明確な態度を取ることになつたのである。

彼女は福音書に書いてある女のやうに、凡ての家財宝石までも友人や、書生に分ち与へて、素裸になつて家を出て来た。一百円ばかりの小使銭を持つてゐたが、それをも産業青年会の仕事に寄附すると云い張つた。勿論十一月から今日までの凡ての労働は無報酬でやつてゐる。

彼女の仕事は派手では無い。隠れたお台所仕事である。然し、産業青年会に出入りする凡ての青年男女は、この高貴な精神の婦人に誰れ彼れと無く感化を受けてゐる。

彼女が輝ける顔を持つて、黙々として働く姿を見ると、何人も感動しないものは無いであらう。彼女は痔疾の患ひの激しい中にも、休みも取ら無いで、神と貧しい人々の為めに奉仕したいと云ふ道念に燃やされて、貴婦人生活から女中奉仕にまで成り下つた。その姿は人を感動させないでは置かない。

私は日本の婦人の好きな型をこの婦人に発見したことを喜ぶ。徹底的に犠牲的で、而も少しもいやな顔をしないで、叡智に富み、悦んで下坐する。その観音の如き姿には日本婦人の生粋の典型の血が流れてゐることを思ふ。然らばこの婦人に新しい婦人運動が判らないかと云へば、十分判るのである。それでゐて、理窟を云は無いで下坐奉仕し、十日や廿日間位の午前四時の起床であれば真似も出来ようが、もう六十日近くそれを続けて少しもいやな顔をしないところに、私は彼女の強味を発見する。彼女は一生を貫いて下坐に奉仕すると云つてゐる。有難いことである。私は彼女の周囲に来る多くの青年男女が、彼女の精神に感染して、更に美しい魂の持主とならんことを祈つてゐる。

彼女の生活そのものが実に私の最も愛する生命の芸術である。彼女がそれを台所を中心として創作してゐるところに私の悦びがある。彼女の台所は奉仕の舞台であり、輝きの殿堂である。

（一九二四・一・七）